

# 関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.13

2010.3

目次

学院史資料室写真集12 .....	1
関東学院史料展 展示史料の紹介 (第6回) .....	2
東京中学院 1895年—1899年 .....	17
関東学院元教職員からの寄稿「私の関東学院 (後編)」 .....	20
学院史資料の紹介 .....	22
資料・情報提供のお願い .....	24
編集後記 .....	24



## 学院史資料室写真集12・ティパーティー コベル氏

「ティパーティー コベル氏」というキャプションが記されているこの写真は、セツルメント指導者のコベル宣教師 (James Howard Covell) が撮影したと思われる。

後列の渡部一高の右隣はコベル夫人、前列にはコベルの子があり、コベル一家が関東学院セツルメントの子どもたちと交流している様子がわかる。



# 関東学院史料展(第6回)

## 展示史料の紹介

「第6回 関東学院セツルメント—関東学院の奉仕教育—」

2009年1月7日～3月31日まで開催

於：関東学院大学 Foresight21 F-703

### ◆展示写真



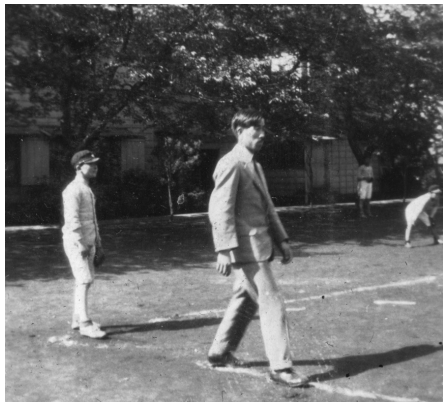
テンネーと関東学院セツルメント

関東学院の建学の精神である「奉仕」を社会事業科（のち社会事業部）の学生が実習するために、1928（昭和3）年、関東学院のセツルメント活動が始まった。商科（のち高等商業部）や神学部の教師と学生もこの活動に参加した。1931年には神奈川の浦島町に、全国からの募金により会館を建設し、労働問題の講座や職業相談と斡旋、児童に対する学業の補習、日曜学校、裁縫、キャンプ、運動会等の活動を行った。

テンネーは学生時代に貧民街で奉仕をした経験もあり、社会事業部の設立とその活動はテンネーの夢の実現でもあった。

写真前列右からセツルメントの指導者渡部一高教授、テンネー学院長、澤野良一教授である。学生は社会事業部の学生でセツルメント活動の実習に参加した。（1・10・13）\*

\*16頁参考資料一覧の番号。以下同様。

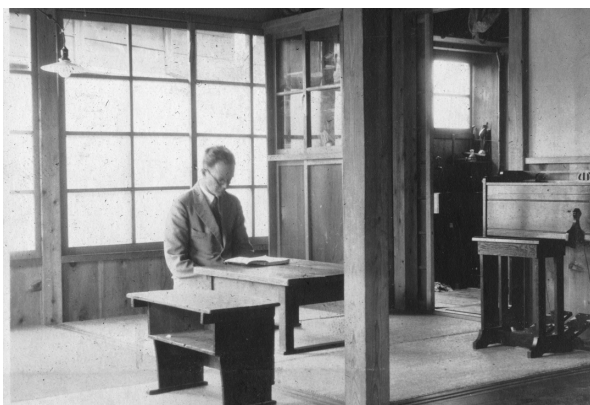


セツルメント指導者 渡部一高教授

渡部はアメリカとイギリスでの留学を終え、帰国後の1927（昭和2）年4月に開設された関東学院高等学部社会事業科の教授に就任し、社会学・社会問題等の講義を担当した。当時は都市の中にも農村にも貧困を中心とした社会問題が深刻であった。渡部は社会事業科の学生の実践の場として、困窮している地域に関東学院セツルメントを開設した。貧しさのために悲観的になっている人が、キリスト教的愛を知り、労働で生活を改善できるようにセツルメント活動を行った。

セツルメント活動の場、「前進館」は渡部の発案で、全国に募金を呼びかけ、セツルメント活動の意義に共鳴した多くの人たちからの寄附により開設された。

花子夫人もセツルメント活動に積極的に参加し、家庭生活に必要な料理、裁縫、行儀などを教えた。（4・18）



セツルメント指導者 コベル教授

コベルは宣教師として来日し、関東学院の教師となった。セツルメント活動の創設者の一人であり、宗教教育を担当し、日曜学校の校長を続けた。セツルメントでティパーティーを行い地域の子どもたちと自分の家族との交流を楽しんだ。（表紙頁参照のこと）

また、日本バプテスト東部組合の社会部の委員を務め、『基督教報』に福祉関係の活動を報告している。

戦時下の日本では平和思想が危険視され、平和主義者であったコベルは、1939（昭和14）年に日本を離れ、フィリピンに活動の場を移したが、1943（昭和18）年12月20日、日本兵によって殺害された。（5・15）



セツルメント指導者 友井楨教授

「前進館」の玄関前、セツルメント指導者の友井楨と地域の子どもたち。

友井は1927（昭和2）年、関東学院神学部の新約学の教授に就任した。キリスト教は社会の救済に積極的に関わるべきである、というラウシェンブッシュの影響を受け、セツルメント活動に積極的に参加した。1933（昭和8）年、社会事業部は一時的に閉鎖となり、学生は明治学院に委託された。社会事業部教授の渡部一高に代わって、神学部教授の友井がセツルメント主任に就任し、セツルメント活動は社会事業部の学生の代わりに神学生が中心となって行った。（5・17・19）

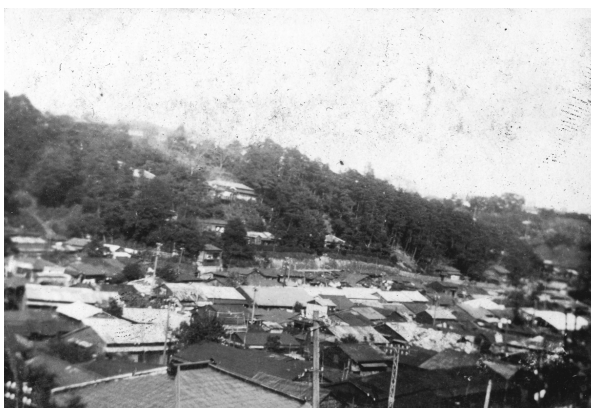


最初のセツラー 門井初雄

関東学院セツルメントは、庚耕地の中心地の一戸を借りて、教授1名、学生10余名で始まった。

セツルメントは地域に定住して、住民との人格的接触を通じて、住民の自力による生活向上などを目的とした活動であり、定住者をセツラーといった。

入口に立っているのは最初のセツラー、社会事業部第1期生の門井初雄で、喧嘩口論の仲裁や代筆、その他、色々と住民の相談にのった。（1・9・11）

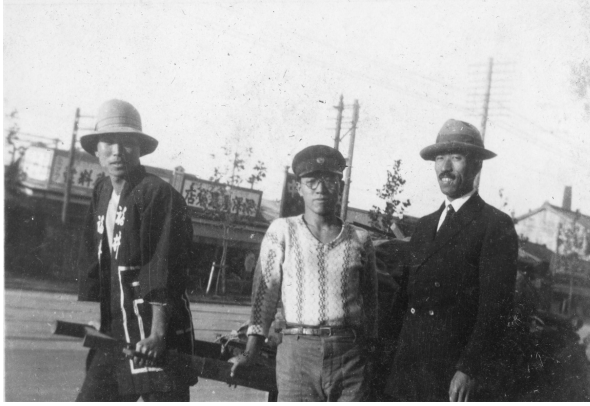


最初にセツルメント活動を行った谷戸の全景

関東学院セツルメントは1928（昭和3）年3月に横浜市南太田町庚耕地、俗称「谷戸」で行うことが計画された。この集落は屑拾いに従事する人が多く、定職がないため罪を犯す人もいた。また、貧困のため不就学の児童も多かった。

関東学院セツルメントは5月5日から開始し、週1回、渡部一高の指導で、社会事業科の学生がお話や運動の指導などを行い、70名以上の児童が参加した。

はじめは露天での活動であったが、後に谷戸の中心地にある長屋の一室を借り、そこで活動した。（2・15）



関東学院セツルメントの移転 一庚耕地から浦島町へ

庚耕地の谷戸が不良住宅区域に指定され、住民の大部分が移転したため、1928（昭和3）年10月、関東学院セツルメントは神奈川県浦島町の共同長屋に移転した。

セツルメント指導者の渡部一高（写真右）は、谷戸にあったセツルメントの備品を3人の学生とともに運んだ。（2・11・15）



関東学院セツルメント会館 起工式

セツルメント活動の拠点となる会館が必要になり、渡部の発案で、一部の有力者からの大口寄附に頼らないで、設立資金募集運動趣意書と募金用の封筒「十銭袋」を用いて全国に募金を呼びかけた。これは、多くの人の支援、協力に意義があり、また、広くこの活動を知ってもらうためであった。募金は順調に集まり、1931（昭和6）年1月27日、関東学院関係者で会館起工式を行った。（4・6・12）



関東学院セツルメント会館「前進館」

「前進館」は1931（昭和6）年4月25日に開館した。

「前進館」は学校関係、教会関係、社会事業関係と一般個人からの寄附によって建設された。渡部一高の願いのように、セツルメント活動を理解してくれる一般個人からの寄附金が多かった。

設備は、敷地総坪数75坪、運動場57坪、建物17.5坪、レジデント室1、事務室1、図書室1、教室2である。

1937（昭和12）年3月、関東学院セツルメントの活動が終わり、「前進館」は同年5月、浦島町会に売却した。（3・4・5・7）



●関東学院セツルメント会館 開館式 (1931年4月25日)



渡部一高教授夫妻と学生



セツルメント関係者集合写真

全国からの募金によって、セツルメント会館が落成し、「前進館」と名づけた。関東学院職員の遠藤憲亮は落成を祝って下記の詩を詠んだ。(5・12)

「貧者の一燈」

十銭のレプタ／今茲に館成りて／<sup>よ</sup>社會のため捧げまつらん  
 外觀の誇りと小さく／内に愛の備へあり  
 蝕れの子等／教へなき子等／小さな魂何處／尋ぬるものは  
 関東学院セツルメント  
 子安の岸頭に／消ゆるなき／貧者の一燈たれ  
 正義又鮮明に／十字の旗高く



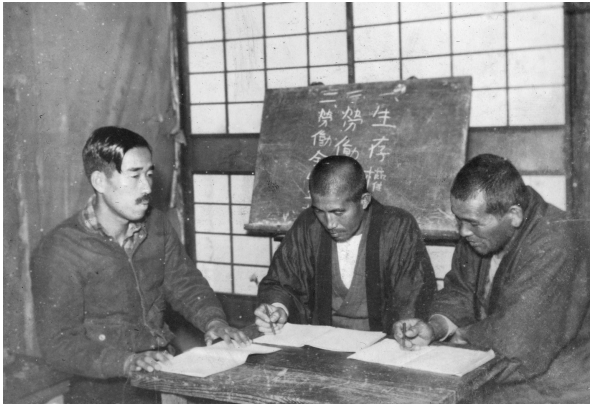
セツルメント委員送別会 渡部一高教授宅にて

セツルメント委員の学生の送別会は、第一部をセツルメント会館「前進館」にてキリスト教式で行い、第二部(思出会)を渡部一高教授宅で食事をしながら行った。写真は1931(昭和6)年2月21日、渡部一高教授宅での思出会。(4)



日曜学校

子どもたちの礼拝を毎週日曜日朝8時半から行い、コベル教授を中心に学生が児童を指導した。コベルはセツルメントの創設者の一人で、日曜学校の校長を10年ほど務めた。(5・16)



労働学校 授業風景

「前進館」ができる前はトンネル長屋と呼ばれる長屋の一番はずれの4.5畳の部屋でセツルメント活動を行った。冬には雪が吹き込んだという。  
渡部（写真左）のほか、高等商業部の教授も講義を行った。セツルメント活動に関わった富田富士雄元学院長はこの時の様子を次のように書いている。  
「狭い部屋の中でうす暗い電灯の下、鉛筆をなめてはノートをとっている日雇いや行商の人たちの労働学校での光景を私は今も忘れることができない。」（文学部『紀要』21号「渡部一高先生の人・学問・思想」より）（5・12）



労働学校 卒業式



労働学校 卒業式記念写真

1930（昭和5）年の労働学校卒業式。卒業生は法被（はっぴ）を着て式に臨んだ。  
写真前列右から4人目が坂田祐高等商業部長、5人目が渡部一高社会事業部長。  
坂田祐の日記に、1929年1月2日にセツルメントを訪問した記事がある。「浦島町の Settlement に向かう、（略）2時15分頃着、大出金作方に立ち寄り年始として金一封（¥5.00）を呈し暫時話して土曜学校の子供会に出席、子供数十名大人も約十名、渡部社会事業科長指導の下に社学生菅野、磯、嶺井、榎本、門井の諸生大いに努む、諸種のプログラム、松原生の御話、Mr. Topping のバイオリン、Mr. Covell の独唱、安村牧師の御話、撮影をなせり、終て余最後の挨拶をなし、Present を分配して散会、門井君のトンネル長屋の三畳に立ち寄り帰宅せるは五時過ぎなりき、大いに寒くなれり」とある。（20）



夜学校 授業風景①



夜学校 授業風景②

夜学校では約10名の学生が毎夜交替して共同長屋の一室で子どもたちに勉強を教えていた。  
1933（昭和8）年10月の『基督教報』にセツラーの野海政式（神学部生）が、「毎日夜七時から九時まで、四つの部屋で自修を続けている。狭い三畳か四畳半の自宅では落付ことも、本を擴げることも出来ない。智識慾に燃えた子供達、宿題を課せられた子供達が灯がつくや否や飛びこんで来る…」と子どもたちが積極的に勉強している様子を報告している。また、1934（昭和9）年1月の『基督教報』には「無料夜学校毎夜約70人」とコベル教授が報告しており、多くの児童が勉強している様子がわかる。（2・3・5・9）





子供銀行

子どもの時から貯蓄の習慣をつけさせるために、無利子であるが子どもに貯金の喜びと大切さを教えた。  
1933（昭和8）年には約50名が参加していた。（1・4・5）



図書部

読書の習慣は少年期に養われ、良書にふれることは豊かな人生観を養う基になるので図書部を設けた。  
最初は、表紙の取れた数冊の本から始まったが、多くの人からの寄贈により蔵書も充実し、一日に何十人もの利用があった。（2・3・4・5）



散髪



洗髪

この地域に住む人たちの生活環境は悪く、特に衛生状態が悪かった。衛生状態を改善するために、歯磨きの指導や、散髪・洗髪を定期的に行った。  
毎回貯金することを条件とし、散髪・洗髪の費用を無料にした。（1）



運動部 野球

セツルメントでは、興味を第一としてできるだけ自由に運動ができるよう野球部、籠球部、デッドボール部などを組織した。また、ボール等運動具の管理を児童が自的に行うよう指導した。

定期的に活動しているのは野球部で、土曜日は午後2時頃より5時半頃までと、日曜日は11時から12時、午後も1時頃から5時半まで練習している。選手は1931(昭和6)年の記録によると約15名いた。

デッドボールは男女共よく行われていた。(2・3)



遠足 三溪園



浦島山で写生

遠足は子どもたちの楽しみである。経済上の理由で学校の遠足に行けない子どもたちも参加できるようにセツルメントの遠足を計画した。(2)



鎌倉遠足 (1929(昭和4)年8月22日) ①



鎌倉遠足 (1929(昭和4)年8月22日) ②

当日、セツルメントに集合して、8時に京浜急行の神奈川新町駅から横浜駅へ、横浜駅で乗り換えて鎌倉駅に到着。鎌倉八幡宮、長谷大仏等を見学して、由比ガ浜で昼食、水泳と夏の休日を楽しんだ。(4)



●キャンプ



礼拝

渡部一高のお話の後の祈り。中央にコベル



川遊び



楽しい食事の準備



訪問に来た三好豊太郎（明治学院高等部教授）を囲んで



キャンプ・ファイヤー  
火を囲みゲームとお話、劇の集い



キャンプが終わりキャンプ用品を積んで  
帰るトラック

夏のキャンプは、関東学院セツルメントの活動の中で最も重要な行事で、事前に十分な準備をして実行した。日程は、毎年1週間と長く、子どもたちは自然の中でキャンプ生活を楽しんだ。浦島町は煤煙に包まれ、子どもたちが夏に水遊びをする運河は油が浮いた状態だったので、豊かな自然の中でのキャンプは子どもたちにとって大きな喜びであった。(3・4・5・8・21)



クリスマス祝会



クリスマス降誕劇

クリスマスは盛大に祝われ、子どもたちの喜びの日であった。  
セツルメントのクリスマスはセツルメント活動を開始した1928（昭和3）年から行われた。それは多くの支援者の協力によって行われ、「中学部学友會奉仕部ヨリ高等学部「セツルメント」クリスマスニ金拾円寄附アリ」と、1928年12月21日の高等学部教員会の記録に残っている。  
クリスマスの降誕劇の練習中に、貧しい馬小屋で生まれたキリストと、自分たちの貧しい境遇を照らし合わせてクリスマスの意味を考える子もいた。(5・14)



無産婦人会

生活改善は主婦の働きが重要である、と無産婦人会を組織し、渡部一高夫人花子が指導した。  
活動として、毎日の賃金の中から5銭の日掛貯金を行い、夫が日雇いの仕事を得られない日や、病気などに備えた。毎月例会を持ち、友井楨教授の話や、料理講習、小規模な消費組合も経営し、また、生活上の相談などを行った。1933（昭和8）年の会員は20余名である。（2・5）



古着市

関東学院教職員や生徒から寄附された古着を、住民に安く提供するため古着市を開いた。この売り上げは病人のための医療費とした。  
写真は1930（昭和5）年12月26日に行われた古着市。（4・8）



餅の販売

年末には、餅つきが行われ、住民に安く餅を販売した。  
1928（昭和3）年11月30日の高等学部教員会記録の報告に「学院「セツルメント」ニテ餅販賣ヲ引受ケタルコト」とあり、セツルメント開始の年から餅の販売を行っていた。（14）

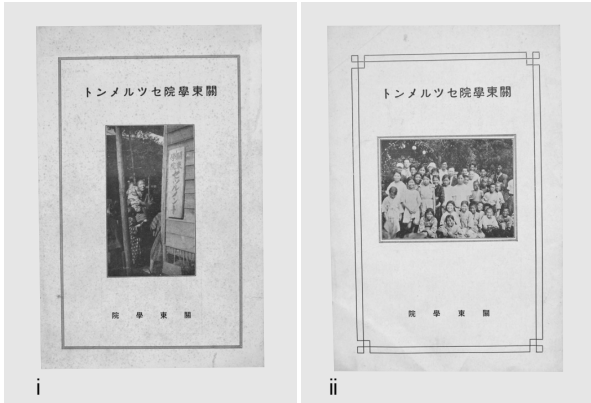


家族慰安会

地域住民の楽しみのために、レコード会や、素人演芸大会などを行った。  
写真は「浪花節と講談の夕」。（1・4・15）



◆展示資料



関東学院セツルメントパンフレット 2種類

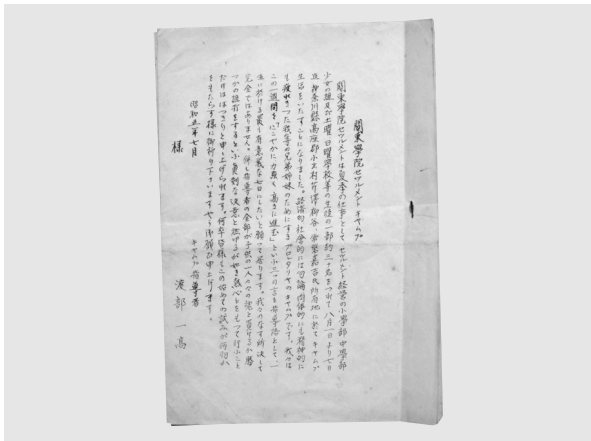
セツルメント活動を理解してもらうためにパンフレットを作成した。

パンフレットは日本語2種類と英語のものがあり、活動趣旨のほか、写真を多く掲載している。

左のパンフレット(i)には、セツルメント活動地区において社会事業部の学生が行った調査の報告が掲載されている。セツルメント活動地区付近の428世帯の調査報告(昭和3年1月)は次のとおりであった。世帯主平均42.3歳、家族平均人数4.3人、一日平均収入1円97銭、一ヶ月平均収入39円40銭、一ヶ月の家賃6円75銭、平均畳数7.6枚、平均燈火数1.1弱。(4)

i…坂田記念館所蔵 ・232×152 (mm), 10頁

ii…大学図書館所蔵 ・228×153 (mm), 10頁



関東学院セツルメントキャンプパンフレット  
1930(昭和5)年8月1日から7日 小出村芹沢

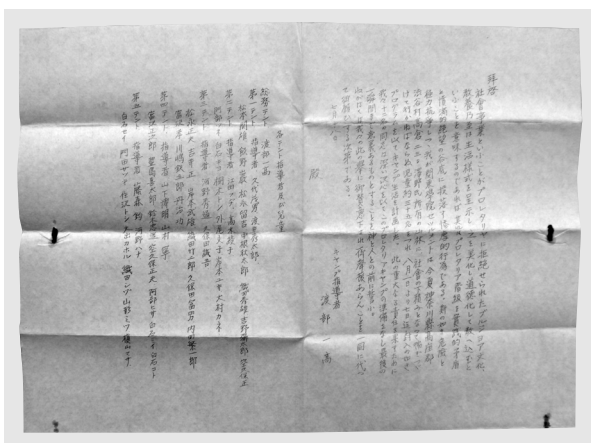
1930(昭和5)年8月1日から7日までの1週間、神奈川県高座郡小出村芹沢柳谷で行ったセツルメントキャンプのパンフレット。

参加者はセツルメントの小学部、中学部、少女の組および土曜・日曜学校等の生徒の一部約30名。引率者は渡部一高教授夫妻ら12名。参加した子どもたちは、指導者と一緒に6つのテントに分散して泊まった。

キャンプの日課は午前5時の指導者祈祷会から始まり(子どもたちは6時起床)、午前中は礼拝、勉強、運動、午後は運動、音楽、自然研究、夜はキャンプファイヤー、ゲームとお話会、娯楽大会と多彩なプログラムで子どもたちを指導した。(4)

大学図書館所蔵。

・245×168 (mm), 6頁



関東学院セツルメントキャンプパンフレット  
1931(昭和6)年8月1日から7日 渋谷村高倉

1931(昭和6)年8月1日から7日までの1週間、神奈川県高座郡渋谷村高倉で行ったセツルメントキャンプのパンフレット。

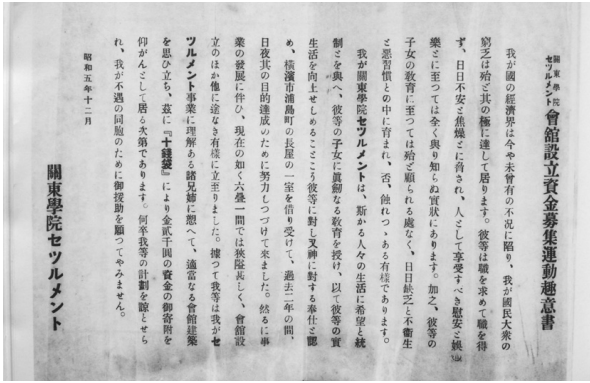
参加者は児童36名。引率者は渡部一高教授ら11名。松林の中に5班のテントを設営し、子どもたちは指導者と共に宿泊した。衛生係として慶應病院の江田ふじ子氏も1週間を通して参加している。

キャンプの日課は、前年とほぼ同内容で、楽しいプログラムが用意された。4日は日曜学校の生徒12名が先生に引率されて訪問し、渋谷小学校で行われたセツルメントの運動会に参加した。6日の午後は、小学校で学芸会が行われ、各テントの子どもたちが猛練習した出し物を披露した。その他、コベル先生の独唱や内務省から来た講師によるお話など盛りだくさんのプログラムであった。

キャンプには訪問者も多く、この年には千葉勇五郎学院長、コベル先生、友井楨先生が訪れ、児童と交流の時を過した。(3・5)

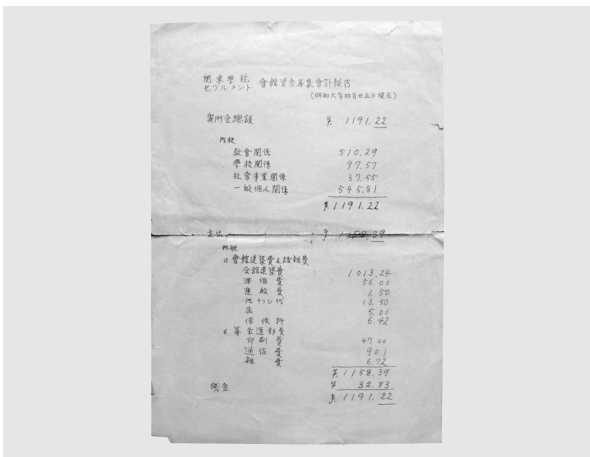
坂田記念館所蔵。

・240×166 (mm), 10頁



開東学院セツルメント会館設立資金募集運動趣意書  
(昭和5年12月) (写し)

1928 (昭和3)年10月、浦島町でのセツルメント活動が始まり、多様な活動を行ってきたが、6畳一間ではその活動に限界があり、活動の拠点となる会館の建設を計画した。建設資金は、渡部一高の発案で、一部の有力者からの大口の寄附に頼らず、全国に募金を呼びかけることにした。(4・6・12)

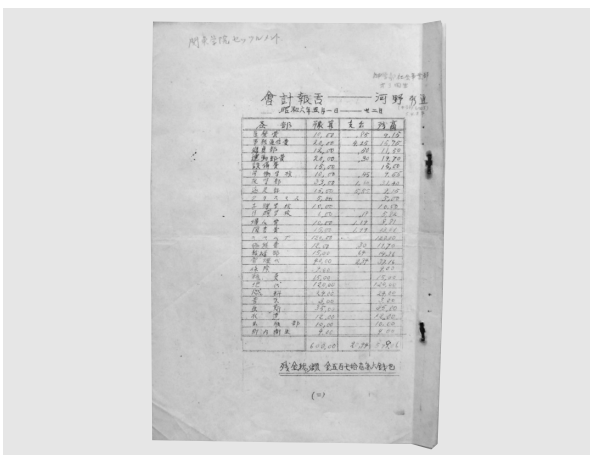


開東学院セツルメント会館資金集會計報告  
(昭和6年4月25日現在)

セツルメント活動の拠点となる会館の建設のための募金活動は1930 (昭和5)年12月から開始した。募金は順調に進み、1931 (昭和6)年1月27日、開東学院関係者で起工式を行い、4月25日に開館式を行った。

募金会計報告によると、教会、学校、社会事業、一般個人から寄附が寄せられた。総額のうち約5割が一般個人からの寄附で、多くの人たちの支援と協力によって会館を建設したい、という趣旨が活かされた。寄附金総額は1191円22銭で、会館建設費は1013円24銭であり、募金金額が建設費を上回った。坂田記念館所蔵。

・240×166 (mm)



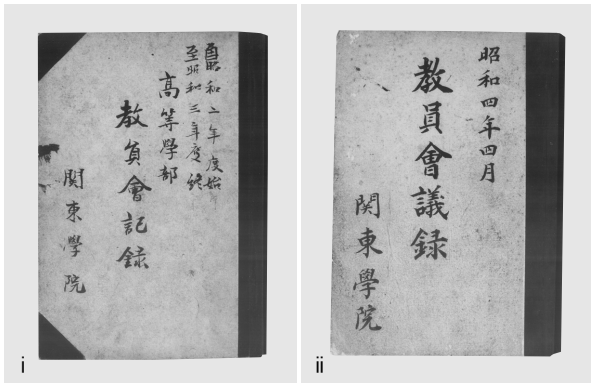
会計報告 (昭和6年5月) と各部の活動

1931 (昭和6)年5月の会計報告と各部の活動が報告されている。少女クラブ、運動部、土曜学校、医療部、写真部、無産者婦人会、図書部、労働学校、日曜学校、その他様々な活動が行われている。

また、セツルメント会館「前進館」の4月の会館利用者は延べ2297名であり、活発に利用されている。坂田記念館所蔵。

・240×166 (mm), 欠落があるため頁数不明





i 『高等學部教員會記錄 自昭和二年度始 至昭和三年度終』  
ii 『教員會議錄 昭和四年四月』

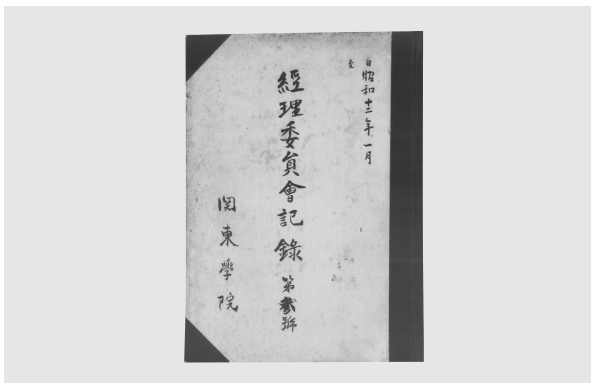
関東学院セツルメントは社会事業部学生実習のために行われた。セツルメント事業について、高等学部教授会で審議したことが会議録に残っている。

セツルメント開設については、1928（昭和3）年3月17日の議事「セツルメント開設ノ件 渡部教授ノ計画ヲ承認スルコト 決定」とあり、諸活動についても次のような報告がある。

1929（昭和4）年12月13日「学院セツルメント：寄附金ニ就テ 無名ノ一工女ヨリシテ金拾円也寄贈シ来ル」

1930（昭和5）年7月4日「セツルメント小供キャンプ實施ノ件 八月一日ヨリ同七日迄小出村ニ於テ開催費用約五十円ノ見込トス承認」

- ・『高等學部教員會記錄』232×160（mm）
- ・『教員會議錄』232×160（mm）



『經理委員會記錄 第參號 自昭和十二年一月』

学院長、理事で構成されている經理委員會の記録によるとセツルメントの閉鎖とセツルメント会館「前進館」の売却について次のような記録がある。

1937（昭和12）年3月17日「セツルメントノ諸事業ヲ来ル三月卅一日限り中止スル旨セツルメント教員會書記本多氏ヨリ書面アリタリ」

1937（昭和12）年5月12日「セツルメント建物ヲ金百●ニテ神奈川県浦島町会ニ賣却スルコト」

- ・235×170（mm）



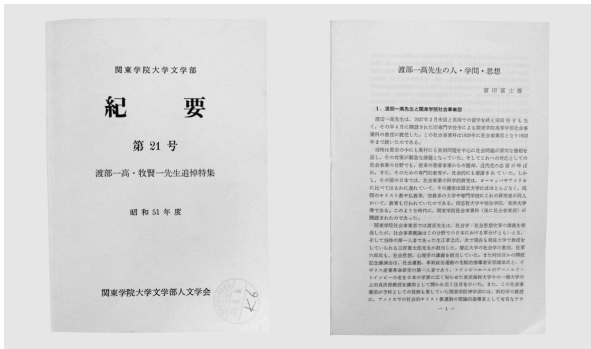
『追悼 渡部一高先生』  
ニュー・ファミリー・センター 編集・発行 1976年刊

渡部一高は1939（昭和14）年に関東学院を辞め、東亜研究所や政治経済研究所常務理事として活動した。1950（昭和25）年に社会教育団体「ニュー・ファミリー・センター」を設立し、その運営に精力を注いだ。

ニュー・ファミリー・センターでの活動は、会員を対象とした講座、講演会、ゼミナール、討論会等を定期的で開催し、講師陣は渡部教授の広い交友の中から各方面の専門家が担当した。渡部教授は社会思想史、その他の講義を担当した。

渡部教授は1975（昭和50）年12月9日に召天し、翌年、ニュー・ファミリー・センターが追悼集を編集・発行した。執筆者は183名（内、外国人20名）。渡部教授の交友の広さと各方面での活動の様子が窺える。執筆者の中には関東学院セツルメント事業に参加した大西武雄、常盤嘉治、富田富士雄、河野秀通、野海政一等がいる。（12・23）

- ・215×153（mm），395頁



「渡部一高先生の人・学問・思想」富田富士雄著  
 関東学院大学文学部『紀要』第21号  
 渡部一高・牧賢一先生追悼特集から

1968（昭和43）年に関東学院大学文学部（英米文学科・社会科学科）が新設され、渡部一高は社会科学科教授として復帰したが、1975（昭和50）年12月9日に召天した。文学部は『紀要』第21号をその追悼号とした。

渡部教授の教え子で神学部卒業後、関東学院に残り、関東学院セツルメントの書記も務めた富田富士雄教授が「渡部一高先生の人・学問・思想」と題して、渡部教授の多方面での業績について執筆している。（7・10）

・211×149（mm）



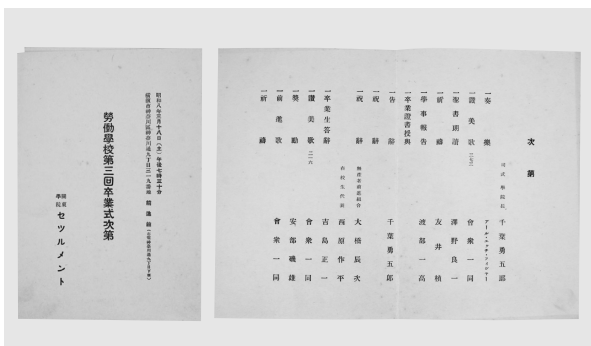
『人ばしら』  
 松本善嗣 編集発行 1935年刊

鈴木庸一は、日本バプテスト神学校がある東京小石川で生まれた。父・鈴木半次郎は博徒からクリスチャンになり、横浜バプテスト神学校、日本バプテスト神学校、東京学院神学部、関東学院神学部・高等学部の賄方をしていた。

庸一は、1931（昭和6）年に関東学院中学部を卒業し、関東学院神学部に入學した。1935（昭和10）年7月10日、伝道実習のため、和歌山県の紀南農村セツルメントへ学校から派遣された。同年7月30日、海辺で日曜学校の児童にお話をしているときに突然の土用波に襲われ溺死した。父・半次郎とともに三ツ沢墓地に眠っている。

『人ばしら』は小学校・中学校・神学部時代の級友と教師、教会関係、セツルメント関係の66名が追悼文を寄せたものである。これとは別に、関東学院セツルメントの生徒たちによる文集『おもひで』がある。庸一は、関東学院セツルメントに積極的に参加し、セツルメントの子どもたちから慕われていた。（7）

・188×127（mm），172頁



労働学校第3回卒業式次第 昭和8年3月18日

セツルメント活動の拠点である「前進館」で第3回卒業式を行った。千葉勇五郎学院長が卒業証書を授与し、衆議院議員で社会運動家の安部磯雄氏が奨励をし、渡部一高教授が作詞した「前進歌」をもって式は終了した。

セツルメントでは、労働者としての自立と教養のために労働学校を開設した。1932（昭和7）年度の生徒数は25名で、授業は週3回行った。授業科目は政治学、経済学、人生問題、社会問題一般で渡部教授、他に学生も教えた。卒業資格として授業日数の3分の2以上の出席が義務付けられていた。日中に労働し、夜遅くに受講するので卒業できる生徒は少なかった。（4・5・15・17）

大学図書館所蔵。

・188×127（mm）



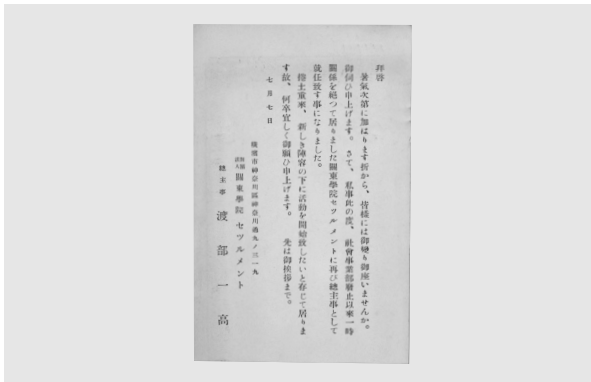
「医療部新設」のための十銭袋（募金袋）

セツルメントに近い約100世帯は大部分が日雇労働者や土工で、悪天候等の場合には月に1週間から10日しか仕事ができないこともあり、わずかな収入で困窮を極めた。特に病気等にかかった時は、蓄えもなく悲惨な状況に陥った。このために、セツルメントでは医療部を新設するために、「十銭袋」を配布した。

1931（昭和6）年の医療部の報告によると、薬品を十分準備していたが患者が少なく、医療部担当者は「大いに喜ぶべき現象」としてこの状態が続くことを願っている。なお、1931年5月の医療部の会計報告によると、予算10円で支出は85銭となっている。（1・3）

坂田記念館所蔵。

・ 225×85（mm）



関東学院セツルメント総主事就任の挨拶状

1933（昭和8）年4月、社会事業部は明治学院と合併授業を行うことになったので、セツルメント活動は神学部の学生が中心となって行った。そのため、セツルメント主任は渡部教授から神学部の友井楨教授に交代した。

1936（昭和11）年3月に神学部の在籍者がなくなり、友井教授は青山学院に移籍し、1936年6月22日に渡部教授が再び総主事としてセツルメント活動の責任者になった。

この挨拶状は坂田祐宛のもので、消印は「昭和11年7月10日」となっている。（5・7・22）

坂田記念館所蔵。

・ 141×91（mm）



関東学院セツルメント閉鎖の挨拶

1927（昭和2）年に始まった関東学院セツルメントは10年間の活動を終え、1937（昭和12）年3月に閉鎖した。

社会事業部学生の実習の一環としてセツルメントを始めたが、1935（昭和10）年に社会事業部が廃止され、セツルメント活動は神学部の学生が中心になって行った。

神学部も1937（昭和12）年に青山学院神学部と合併し廃止となり、それに伴い、関東学院セツルメントは閉鎖した。

コベル教授は、社会事業部と神学部の閉鎖のため、「社会活動を行う資格がないと文部省が決定した」とセツルメント閉鎖の経緯を報告している。（5・7・15・18）

坂田記念館所蔵。

・ 195×538（mm）

●関連年表

- 1927年 財団法人関東学院が組織され、東京学院が合併して、その組織に入り、高等学部（社会事業科、商科）、神学部となる（4・1）。
- 1928年 学院設立の主旨である奉仕を实践することと、社会事業科生の実習のために庚耕地に戸（6畳1間）を借りてセツルメントを開設、教授1名、学生10余名で活動開始（3・15）。セツルメント最初の運動会を公設浴場裏広場で行う。児童約120名参加（5・19）。高等学部教授会でセツルメント活動に年300円を支給することを承認（5・22）。セツルメント活動を行っていた庚耕地の谷戸が不良住宅区域に指定され住民の大部分が移転散逸したためセツルメントを神奈川区浦島町のトンネル長屋に移転するため、谷戸セツルメント解散会を行う（10・29）。浦島町のトンネル長屋に3畳の部屋を借りてセツルメント再開（10・）。セツルメントで正月用の餅を販売（12・）。
- 1929年 子供会を開催。タッピング教授のバイオリンやコベル教授の独唱、安村三郎牧師のお話、坂田祐高等学部長の挨拶等多彩なプログラム。終わりに子供たちにプレゼントを分配（1・2）。高等学部の名称を廃して、商科を高等商業部、社会事業科を社会事業部と改称（4・）。鎌倉遠足。鎌倉八幡宮→長谷大仏・観音→由比ガ浜で昼食・水泳（8・22）。
- 1930年 セツルメント・キャンプ。高座郡小出村芹沢（現茅ヶ崎市）（8・1～7）。『関東学院セツルメント児童時報』創刊号刊行（10・4）。関東学院セツルメント会館設立のため募金開始（12・）。
- 1931年 セツルメントのための募金により75坪の土地と木造の会館「前進館」が開設。開館式を行う（4・25）。セツルメント・キャンプ。高座郡渋谷村高倉（8・1～7）。
- 1932年 セツルメント・クリスマス（1・2）。第2回セツルメント労働学校卒業式（3・21）。
- 1933年 第3回セツルメント労働学校卒業式（3・18）。セツルメント・キャンプ。高座郡渋谷村高倉（8・1～7）。
- 1934年 セツルメント・キャンプ。愛甲郡下川入村（8・4～10）。
- 1935年 学院セツルメント後援音楽会。コロンビア音楽の夕べ。開港記念会館で開催（1・19）。神奈川県より学院セツルメントに対して社会事業助成金授受（2・11）。社会事業部廃止（3・31）。セツルメント遠足。53名が参加（5・12）。高等商業部でセツルメント紹介の集会を小講堂で行う（6・11）。セツルメント・キャンプ。六合村高倉で行う（8・1～7）。関東学院で古着を集めてセツルメントへ贈る（12・）。セツルメント・クリスマス（12・21）。
- 1937年 神学部は青山学院神学部と合併し、廃止（3・31）。セツルメントの諸活動を中止（3・31）。セツルメントの建物を浦島町会に売却。

.....  
参考資料一覧

- 『関東学院セツルメント』 関東学院（発行日不明・昭和初期頃）＊坂田記念館所蔵
- 『関東学院セツルメント』 関東学院（1930年12月？）＊大学図書館所蔵 注）1と2は別物
- 『関東学院セツルメント資料』＊坂田記念館所蔵
- 『関東学院セツルメント記録』＊大学図書館所蔵
- 『基督教報』第920号、第922号、第936号、第954号、第965号、第976号、第985号、第990号、第1008号、第1012号、第1013号、第1019号、第1030号、第1034号
- 『関東学院史資料』第6集 関東学院史編集室（1979年10月）
- 『関東学院百年史』 関東学院（1984年10月6日）
- 『関東学院週報』第12号、第73号、第135号 関東学院
- 『関東学院學報』第3号 関東学院學友會雜誌部（1930年5月16日）
- 『関東学院学報』第12号、第29号 関東学院（1996年9月～）
- 『磐』第2号 関東学院高等学部学友会（1929年2月27日）
- 『紀要』第21号 関東学院大学人文学会（1977年5月15日）
- 『高等部たより』第20号 関東学院大学燦葉会高等部会（1989年12月17日）
- 高等学部教員會記録 関東学院 自昭和二年度始 至昭和三年度終
- 『バプテストの横浜地区伝道 1873-1941年』大島良雄 ダビデ社（2007年8月25日）
- 『日本につくした宣教師たち』大島良雄 ヨルダン社（1997年11月30日）
- 『日本キリスト教歴史大事典』教文館（1988年2月20日）
- 「2008年度関東学院全職員合同研修会」配付資料より（2008年8月6日）
- 「キリスト教史を学ぶ会」第26回資料より 鎌倉雪ノ下教会（2006年7月26日）
- 『キリスト教と文化』第7号 関東学院大学キリスト教と文化研究所（2009年3月）
- 「日本人社会学者小事典～三好豊太郎」
- 通報録 関東学院
- 『関東学院中學部一覽』 関東学院（1939年1月、1940年10月）

【前号の訂正】

p.16 上から3つ目の資料名  
 (正) AN EDUCATIONAL CHALLENGE FROM JAPAN TO AMERICA'S BAPTIST LAYMEN  
 (誤) AN EDUCATIONAL CHALLENGE FROM TO AMERICA'S BAPTIST LAYMEN

p.21 関連年表の1905年  
 (正) グレース・ウエップ  
 (誤) グレース・ウエツプ



## 東京中学院 1895年－1899年



このたび関東学院の源流の一つ、東京の築地に生まれた東京学院（東京中学院）を記念する碑がその地に建立された。これを機会に築地における東京学院の5年間に注目したい。

築地外国人居留地は1858（安政5）年の日米通商条約に基づき、1867（慶応3）年7月、築地鉄砲州を外国人専用居留地とすることになっていた。しかしここには中津藩中屋敷など7つの藩の屋敷や、人家が軒を並べて建っていた。そのため、それらの建物を撤去することに手間取り、ようやく1870（明治3）年6月に築地外国人居留地が開設された。実はここは江戸時代に、明暦の大火後に焼け跡の残骸・瓦礫を運び込んで、低湿地帯を埋め立てたところである。築地海岸は遠浅で、横浜のように外国船の出入りが容易にできなかった。そのため、ここは貿易市場としては条件が悪かったこともあり、外国の貿易商人よりは外国人宣教師たちが多く住み着いた。こうして築地はキリスト教の学校と教会の町として発展した。立教学院、明治学院、女子学院、青山学院などがこの地を発祥の地としている。今は高層の美しい建物からなる聖路加病院（立教学院と同じ聖公会に属している）の各種施設が林立している。

東京学院は最初の1895年から1899年までは東京中学院と呼ばれていた。英語名は Tokyo Baptist Academy であった。この学校は築地42番地と43番地に開設された。ここにはアメリカ長老教会宣教団体所有の建物があった。2008年秋に行われた築地居留地研究会の席上で、東京中学院があった場所はもともと新栄女学校（後に女子学院に併合）があり、東京中学院の初代学院長であった渡瀬寅次郎の奥様がその学校の卒業生であったということを教えていただ

いた。そうすると、その場所を入手するために、築地居留地に住むアメリカ人宣教師たち同士の交渉だけでなく、渡瀬寅次郎夫妻の協力があつたと推測される。この場所については、アメリカ側への報告書では「got hold of」（入手した）とあるので購入したと理解することもできる。しかし大島良雄によると借家であったという。やがて不平等条約が改定されることが予想されており、そうすれば、外国人居留地を出て、もっと適切な場所に学校を設置できることになる。事実、明治政府は1894（明治27）年にイギリスとの改正新条約を締結した。東京中学院は外国人が各地に住む「内地雑居」が認められることを想定して、やがては別な適切なおとろに移ることも含めて、建物を賃借したのであろう。実際「暫定的に外国人居留地の築地42番地に学校を置く」という表現が1895年の The American Baptist Missionary Magazine にみられる。1899年からは外国人が自由に各地に住むことができるようになった。この小論はちょうど東京中学院の創立から「内地雑居」が可能になった1899年までを扱うことにする。

東京中学院の設立については1895年の The American Baptist Missionary Magazine にいくつかの関連記事が掲載されている。恐らく数年前から学校開設が話題になっていたのであろうが、支援を求める宣教活動広報誌であるこの雑誌には、開設直前の記事から初めて掲載された。それによると、東京中学院の開設については、築地30番地に住むG.タフト宣教師の住宅で日本在住アメリカ・バプテスト宣教師会が開催されて、学校開設が正式に決定された。その報告記事によると、E. W. クレメントが学院長 (principal)、渡瀬寅次郎が副学院長 (vice principal) となっている。実は、日本国内では、渡瀬寅次郎が学院長として公表されていた。日本においては、札幌農学校の一期生であり、教育畑ですでに高名な渡瀬寅次郎を看板として、役所からの認可を獲得し、学生募集を推進したのであろう。これにたいして、アメリカ国内では、クレメントを前面に出して、設立の基金募集を訴えたのであろう。もっとも東京中学院の現場の運営実務はクレメントが行っていた。

東京中学院理事会 (Advisory Board) の構成はG. W. タフト (東京築地在住、後にアメリカのシカゴのノーザン・バプテスト神学大学院学長)、J. L. デーリング (横浜在住、横浜バプテスト神学校第二代目学校長)、S. W. ハンブレン (仙台在住)、R. H. タムソン (神戸在住)、E. W. クレメントからなっていた。(渡瀬寅次郎はこの理事会に加わっていない。)

東京中学院の課程は5年間で、明治19年に設置された一

般の「尋常中学校」と同じ5年間であった。授業については、「有益な差違」(beneficial variations)を備えているという。国語、漢文、英語、数学、理科、地理、歴史、経済、倫理、唱歌、図画、体育、聖書が授業科目となっている。特に英語または日本語で倫理(道徳)の授業が毎日おこなわれているという。聖書の授業は、横浜からA. A. ベンネットが築地まで出かけて来て教えた。他にG. W. タフトとI. イデ(日本人だが不詳)が聖書を教えた。ベンネットがわざわざ多忙な中を横浜から週に一度やって来て「キリストの生涯」を教えた。彼がここで教えたのは東京中学院がバプテスト神学校に入る前の準備課程となるものと理解されていたからであろう。クレメントも横浜バプテスト神学校との関連について、東京中学院の設立趣意をこう記している。

「宣教師の人数がどんなに多くても、またどんなに熱意をもって活動しても、十分な資格のある日本人の支援がなくては、それほどの宣教成果をあげることはできない。横浜バプテスト神学校が宣教の必要に十分答えることができずにいる。神学校自体が適切な予備教育を受けていない学生を受け入れて訓練することは無理である。それゆえ、今や、キリスト教会教職への使命に召されている若者たちが、東京中学院で予備的な教育と訓練を受けるように勧められている。ここで十分な訓練を受けて神学校に入学するならば、神学校において、学生はよりよく学ぶことができるであろう。またやがては、その若者たちはキリストのために

ますます有能な働き人になるであろう。またバプテスト派に属する若者たちを、教会に貢献できる有能な信徒に教育し、訓練することが、新設の東京中学院の目指すところである。つまり、東京中学院は日本のバプテスト教会に誠実で有為な信徒たちを育成することである。」

1895年に始まった東京中学院は3年後の1898年に2名の卒業生を出した。その2人は入学前の前歴と学力を評価されて3年生に編入したので5年の課程を待たず卒業した。この2名は東京中学院の設立趣旨に沿う人物たちであった。一人は渡部元である。彼は根室出身で、東京中学院を経て、横浜バプテスト神学校に進んだ。やがて渡部はバプテスト教会の有力な牧師となった。その息子には関東学院大学教授をつとめた渡部一高と相川高秋がいる。もう一人の卒業生は神奈川県西北部の上溝出身の鈴木房吉である。鈴木は後に医学の道に進み、通信病院院長を歴任した。一方はキリスト教会教職として、もう一方は篤信なキリスト教信徒として生涯をおくった。

1895年の秋学期から始めたので、初年度は2学期だけであった。初年度は18名が入学の登録をした。そのうち15人が学年末まで在籍したという。18人の学生中、半数がキリスト教会教職志望の学生であり、他の半数が一般学生であった。正規の課程としては1年生と3年生の授業が行われた。それに英語特別クラスが開かれていた。

学生たちの自活(self-support)の事情についての面白



東京中学院(築地)

い報告記事もあるので、ここに紹介したい。学生はニワトリの世話をし卵を売って収益を上げたという。(J. C. ブランドとA. A. ベンネットがそれぞれニワトリ6羽を東京中学院に寄贈してくれたと報告されている。)その他に学生は、日本語教師、幼稚園教師、体育教師、菜園係、牛乳配達員、学校用務員、厨房・食堂係、パン屋の仕事、築地図書室係、アジア協会図書館係などをしていた。

1896年3月にクレメントはアメリカの支援者たちに東京中学院のために英語テキストを寄贈して欲しいと訴えている。築地42番地の自分の住宅に送っていただきたいと記している。さらに親切にも、2オンス(約60グラム)あたり1セントの送料で届くとも記している。

クレメントが訴えているテキストは次の通りである。

No. of copies (必要部数)

- 10-15. Foster's "First Steps for Little Feet in Gospel Paths."  
 5-10. Foster's "Story of the Gospel."  
 5-10. "Pilgrim's Progress."  
 10-15. "Aesop's Fables."  
 10-15. Pratt's "Practical English Exercises."  
 5-10. "Robinson Crusoe."  
 5-10. "Rasselas."  
 5-10. "Seven American Classics."  
 5-10. "Seven British Classics."  
 5. "The Vicar of Wakefield."  
 5. "The Sketch Book."  
 "Heart of Oak Books" (Readers).  
 5-10. "Pratt's "Stories from Shakespeare."  
 5. "Comegy's "Primer of Ethics."  
 5. Hyde's "Practical Ethics."  
 10-15. "Old Testament Stories in Scripture Language"  
 (No. 46 in Riverside Literature Series).

これらは英語入門程度のやさしい読み物である。インターネットでこれらの書籍を検索してみたが、今でも手に入るようなポピュラーなものである。

クレメントの教師像をここで紹介したい。これはこのたび出版された『関東学院の源流を探る』の中のクレメントの評伝の中に引用した。

柳生直行はこれを記して教育のあり方について私たちに反省を促している。

「学校開設後の2年目、1897年9月9日に大きな台風があって、校舎兼宿舎の屋根が全部吹き飛ばされてしまった。博士は生徒たちの監督と世話に没頭し、屋根のない建物の中

で、夜もほとんど眠らず、片手に傘、片手にランタンを持ち、ハネを上げながら、部屋から部屋へと渡り歩き、生徒たちが雨にぬれないように注意することもしばしばであった。」柳生はクレメントの後姿から学び取り、「キャンパスがどんなに立派になろうとも、『片手に傘、片手にランタン』というあの姿を決して見失ってはならないと思うのです」と言う。教師は学生のために労を惜しんではならない。そして学生はこれに答えていかねばならない。

東京中学院は1899年には市ヶ谷駅に近い牛込左内町29番地に新しい校舎を建設し、移転した。そして学校名も東京学院(英語名はDuncan Baptist Academy)と称した。東京学院のその後については『関東学院の源流を探る』の中のダンカンの評伝も見ていただきたい。

最後に、近代日本の学校教育制度の確立の流れの中での東京学院の位置付けを見ておきたい。

東京中学院ができて5年目に、すなわち1899年に、勅令359号として「私立学校令」が公布された。それは官立学校に準じて政府の監督を私立学校にも及ぼすことを目指すものであった。さらにこの勅令と共に文部省訓令第12号「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルノ件」が発令された。それは私立学校においても、たとえ学科課程外でも宗教教育や宗教上の儀式を行うことを禁じたものであった。これらは明らかにキリスト教学校を規制することを目指していた。それまではキリスト教男子校は「尋常中学校」として認可を受けることができていた。これにより上級学校受験資格と徴兵猶予の特典が与えられていた。ところがこの訓令により、キリスト教学校が礼拝や聖書の授業を行えば、その認可を取り消されるばかりか、卒業生の上級学校受験資格と在学中の徴兵猶予の特典を失うことになった。明治初期と中期にはキリスト教学校が先駆的な働きをしたが、これにより、キリスト教学校は深刻な打撃を受けた。東京中学院も例外ではない。しかしこの時期にも耐えて、東京中学院は東京学院と名称を変更し、中等科と高等科を設けることにした。1903年には専門学校令が公布されたので、これを機会に、東京学院は1905年に専門学校令による高等科を設置した。やがて訓令第12号の規制が緩和され、中学校の呼称は用いることはできなかったが、キリスト教系中等学校に上級学校受験資格と徴兵猶予の特典が認められた。このため横浜に開設された学校は中学関東学院という名称で始まった。後に東京学院の高等部がこれに併合されていった。(関東学院大学名誉教授 高野 進)

(2009年11月7日(土)開催のNPO法人築地居留地研究会定例研究会の講演内容を収録しました。)

## 〔関東学院元教職員からの寄稿〕

### 私の関東学院（後編）

関東学院元職員 森 孝久

#### ＜六浦小学校に＞

無事に幼稚園を卒園し、1952（昭和27）年4月、大学礼拝堂で行われた小学校の入学式で坂田祐先生の威厳にみちた言葉を聴き、今までと違う環境になったことを実感した。幼稚園の仲間も半分は他の小学校に移り、新たな友達と1学年2クラス50名で小学校6年間のスタートをきった。

教室は青雲寮の中寮の一階で下駄箱のすぐ側と記憶している。クラスは「まりや」組で担任は野上先生。いたずらな私は、先生を困らせた一人である。優しく、忍耐強い指導方法で生徒一人一人に接してくれた野上先生には大変感謝している。野上先生には2年間お世話になった。思い出のいくつかを紹介したい。母が相談したのか、あるいは昼食のおかずには必ず入れるように先生が伝えたのかかわからないが、毎日お弁当箱を開くと私の苦手なき

んぴらごぼうが中にあった。食べ終わるまで先生は側にいて牛蒡・人参を作っている農家の方々の話をしてくれた。そのおかげで数日後にはいやいや食べるのではなくおいしいと実感できるようになった。先生の故郷が宮城県なので父の実家の山形に母と帰省する時に仙台まで一緒したことが忘れられない。私は授業ではおとなしく、課外活動は頑張るので遠足や運動会が近づくと天気心配で前日からそわそわしてよく注意をされた思い出がある。

2年生の時には、富士モーターのヘリポート（現日産自動車）から朝鮮戦争に頻繁に飛び立つ米軍ヘリコプターの騒音でしばしば授業が中断された苦い記憶がある。

3年生から6年生までの4年間はなぜかクラス替えにならず同じく「まりや」組で松岡（松村）先生に担任をしていただいた。

この年度から制服と、学年カラーが出来たと記憶している。私たちの学年はブルーで平潟湾の海の色に合いうれしかった。制服は当時珍しい紺の上下で男子は半ズボンで、冬には近所の人から寒くないかと心配された。また、帽子には学年カラーが入り誇らしげに通学した。高校2年の時、我が家にテレビが設置され番組の中でボードビリアンの川田晴久さんが同じような帽子をかぶり「地球の上に朝が来る」と歌われた時には懐かしさで一杯になった。

この頃から野球クラブに入りソフトボールに明け暮れ、放課後は大学硬式野球部の球拾いで帰宅時間が遅くなり、特に大学生にとって当時貴重な硬式ボールが青雲寮の縁の下に入った時には私の出番で制服が泥だらけになった。親によく怒られたが大学生に折れたバットをもらい釘で補修し自分の宝物として素振りをした。「川上哲治」、「別当薫」、「千葉茂」などプロ野球選手になりきり遅くまでスイングしていた思い出はつきない。それ以降、好きな野球を50歳まで続けることになる。

なぜか文化クラブでは「珠算」の指導を菅野先生から受けた。算盤を週1回習ったことで暗算が得意になり、算数の授業に反映したのではないかと思う。大学卒業後、金融機関に就職、勤務した時には算盤のありがたさが身にしみた。菅野先生本当に有難うございました。

3年生の時、雨風の時の移動が大変だった大学礼拝堂を使わなくてもよくなった。小学校の礼拝堂（現中高体育館）と図書館が完成し、校舎から渡り廊下で結ばれた。新築披露を兼ねてNHKのラジオ番組の収録が行われた。童謡歌手の伴久美子さんが同じ小学生とは思えない素敵な衣装で「ねこ踏んじゃった」を歌われたことが印象に残っている。

4年生になると課外活動も宿泊を伴うものになり伊豆狩野川のほとりにある自然満喫のひなびた嵯峨沢館に泊まり露天風呂等を楽しんだ。嵯峨沢館は1958年の狩野川台風で流されたが、後に復興し高級旅館として現在に至っている。

船越の自宅に帰る道順は、友達と和田山の下を通過して追浜天神橋に抜けることが多かった。途中防火用水があり遊び場になっていた。ヤゴとりに夢中になって落ちてしまい大騒ぎになり二度目の新聞記事になってしまった。その時通報してくれた方々、救助してくれた方々など多くの方々の連携プレーにより大事に至らず助けられたことに大変感謝いたします。その後、上級生からはからかわれるし、先生からは寄り道禁止が出てしばらくはおとなしく反省していたが、すぐに忘れて能天気と言われても仕方のない行動をしていたのではないかと思う。

5年生になると三春台の小学校とのソフトボールの親善試合があり6年生と選抜チームが組まれた。全校応援の中、見事



入学式



アヒル小屋の前で 6年生



勝って指導していただいた真部先生に飛びついた記憶がある。三春台の選手達のなかで中学校、高校と野球を続けた選手は練習試合のたびにあの時の悔しさを語るのので、両校にとって親善試合以上の交友が続けられた。

この年、運動会に葉山小学校の生徒たちが参加し合同で開催されて、多くの友達と親交を深めた。

課外活動は上野駅から長岡行の列車に乗車し水上で宿泊した。谷川岳の雄大な眺め、往復12キロの湯の小屋までのハイキングは子ども心に走破した自信と運動が苦手な友達を励まし全員で達成したことは何事にも立ち向かう精神力を植えつけてくれたと確信している。途中の雷の怖さ、蛇の多さにはびっくりし、蜂の子を恐々と食べた思い出がある。

マラソン大会が初めて行われ、グラウンドをスタートに夕照橋-野島-野島橋-洲崎-竜宮館-内川橋-グラウンドの平潟湾1周のコースで行われた。当時は車も少なく障害がなかったからできたのではないかと思う。ただし、二つの橋は木製で、特に野島橋は隙間があり怖かったことを覚えている。先生からは1周3.2キロと聞いていたが全員が完走できた。沿道の声援がすごかったので、それも全員完走の一因になったと思う。

その他、鳩とアヒルを飼育していた。餌を与えたり、小屋の掃除は当番制で、担当になると近所の八百屋さんへ菜っ葉をもらいにいったりした。

6年生になるとクラスの中から外部受験に挑戦するものが4、5名出てきて、教室での席もグループ別になり授業を受けるようになった。内部受験の仲間たちも入学選抜試験の勉強に熱が入っていた。その中でソフトボール校内大会に向けて、練習試合10回のうち1度も勝てなかった真部先生が指導する「よせふ組」にどうしたら大会で勝てるかをクラスで話しあった。その結果、松岡先生から私が監督を命じられ、仲間たちも「打倒よせふ」に燃えていたので、放課後は練習に明け暮れ、勝つ確率0%の「まりや組」が見事優勝した。このことが将来高校で監督になった時の原点になったのではないかと思う。「よせふ組」の悔しさは卒業後も続き、50歳のときに同窓会を開いたときに、同じメンバーで試合をしたいとの申し入れがあった。6年生の勝者の笑顔、泣き崩れた敗者の姿が思い出されたが、女の人たちは呆れていた。

課外活動は清里の「清泉寮」に宿泊し、美し森、飯盛山等をハイキングして自然を満喫した。清泉寮ではロッジごとに分かれて宿泊したので満天の星のもと朝方までお喋りが続き、楽しい思い出を作った。ここ数年清泉寮に通っているが、富士山を正面に望みアイスクリームを食べていると次回のクラス会はここでしたいと思う。ぜひ実現したい。

2月に修学旅行で静岡県の登呂遺跡に行った。久能山で古代、反射炉で江戸時代を勉強し、東府屋旅館で温泉を楽しみ最後の親交を深めた。

卒業式のあとの記念写真は、次年度竣工する建築中の新校舎前で写そうとの声が誰からともなく出て、急遽礼拝堂から場所を移動した。

翌年からの新校舎に伴い、暇な時間の多くをグラウンドの草むしりに割いたことが誇らしく思われる。

昼休みや放課後の「ソフトボール」、「三角ベース」、「ドッジボール」、「缶蹴り」、「水雷・駆逐・母艦」、「泥棒・巡査」、「押しくら饅頭」、「ハンソン山登り」、「馬跳び」等多くの遊びを通して学院生活を満喫した。

6年間を楽しく過ごせたことは、担任の松岡先生、真部先生を含め多くの先生方の慈愛あふれる教育の賜物と感謝しています。

「まりや」、「よせふ」の46名の友よ、多くのよき思い出を有難う。そして同じ学び舎で過ごした先輩、後輩たちにも感謝いたします。

卒業後にはシオン会で坂倉会長のもと3年間会計役をたまり、学校に関わりを持ち、より母校の良さを実感しました。今後の末永い発展を祈願し終わりとさせていただきますが、私が在学中お世話になった先生方に感謝の意味をこめて、既に天に召されている先生方もおられますがお名前を掲載させていただきます。

坂田祐、下平千太郎、下平潤子、岡本富士子、関頼武、岡島キヌ、須藤孝、松岡雅子(松村)、菅野種子、真部正、野上弥生、進藤和江(敬称略)



清泉寮



ハイキング



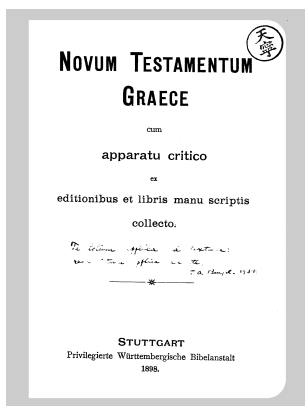
第4回 卒業記念写真(1958年)

## 〔学院史資料の紹介〕

### テンネー家から贈られた3種類の聖書

このたび関東学院創立125周年にあたり、テンネー博士が最期まで所持されていた聖書三冊、三種類が学院に寄贈された。これらについて紹介したい。

NOVUM TESTAMENTUM GRAECE  
STUTT GART  
Privilegierte Württembergische Bibelanstalt  
1898



・150×102 (mm), 660頁

これはドイツのシュトゥットガルトにおいて1898年に出版されたギリシア語新約聖書である。ヴェルテンベルグ聖書協会発行とある。編集者はエーベルハルト・ネストレ(1851-1913)である。ネストレは新約聖書ギリシア語本文の研究に生涯をささげた。その初版である。今日の私どもが手にすることのできるものは、息子エルウィン・ネストレが受け継いで編纂したものである。

新約聖書ギリシア語を専門としていたテンネー博士にふさわしい遺品である。博士はこれをよく利用されたようで、革表紙が本体からとれてしまっている。写真のように表紙をめくると英文が記されている。これは James Hope Moulton 著『新約聖書ギリシア語文法書』から引用したものである。もう一つ最後の頁の余白にもギリシア語文と英文が記されている。この方は古代および近代の聖書解釈者の言葉である。これらは、万年筆のインクの色があせていて、残念ながら簡単に解説できない。この部分の紹介は次の機会にまわしたい。

今回は、この新約聖書のタイトルの下に博士自身によって書き込まれた言葉に注目したい。

Te totum applica ad textum;

Rem totam applica ad te.

J.A.Bengel, 1734

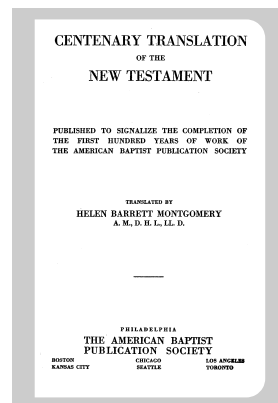
「あなたの全身全霊全力を聖書本文に集中しなさい。

次にその聖書主題をあなた自身の生き方にあてはめなさい。」

これはヨーハン・アルブレヒト・ベンゲル(1687-1752)の有名な言葉である。ベンゲルはドイツ・ルター派に属した新約聖書学者で、敬虔主義の影響を受けた人。新約聖書注解書を残している。ベンゲルは聖霊の導きのもとに聖書の深い内容把握に迫り、さらにそこにとどまらず、それを自分の生き方に当てはめようとした。真摯な心のあり方が示されている。これはテンネー博士自身の聖書の読み方にも通じていたのである。

右上にテンネー博士の捺印は「天寧」とある。

CENTENARY TRANSLATION  
OF THE  
NEW TESTAMENT  
TRANSLATED BY  
HELEN BARRETT MONTGOMERY  
A. M., D. H. L., LL. D.  
PHILADELPHIA  
THE AMERICAN BAPTIST  
PUBLICATION SOCIETY



・164×100 (mm), 724頁

これは英訳の新約聖書で、1924年にアメリカ・バプテスト出版協会創立100周年を記念して出版されたものである。訳者のヘレン・バレット・モンゴメリーは名門女子大学、ウエルズリー大学、ブラウン大学を卒業。一時期、ウエルズリー・プレップ・スクール副校長をした。後に、自動車

産業の実業家、ウィリアム・モンゴメリーと結婚。教育者、社会改革運動家、女性の権利の唱道者、バプテスト教会の信徒の指導者であった。1914年-1924年、Women's American Baptist Foreign Mission Society (女性アメリカ・バプテスト外国宣教協会) 会長、1921年-1922年、American Baptist Convention 会長を歴任。この英訳の新約聖書は、女性による単独訳としては歴史上最初のもものとされる。日常生活の中で使われている、当時のやさしい英語に訳されている。訳者は緒言の中でこう記す。

「訳者は、深くへりくだって、なお足りないところがあることは承知の上、長年の楽しい仕事の結果をここに捧げます。この聖書が、かつて地上の生活を送られたひとりの完全なお方の、すばらしい事実と力を新たに理解させるものになるようにと深く願っております。救い主なるお方を愛し、従いつつ、訳者はこの英訳新約聖書を捧げます。」

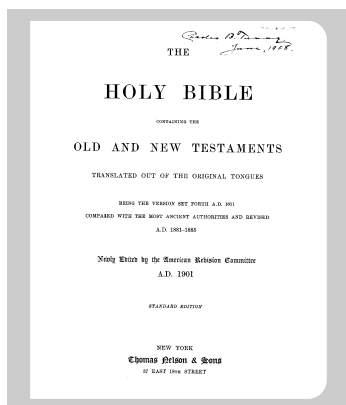
さらに次の言葉が添えられている。

「あなたの光と真理を送ってください。

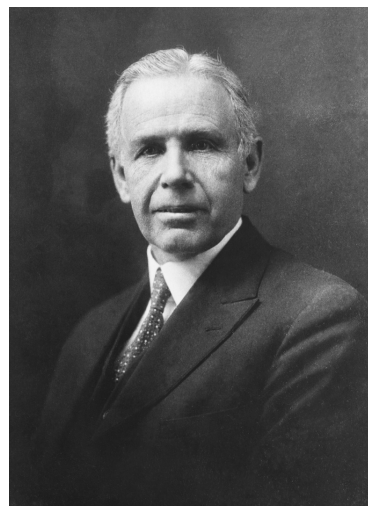
そしてその光と真理が私を導くようにしてください。」

彼女はこの聖書の売り上げ金をすべて外国宣教に捧げた。外国宣教に命をかけたテンネー博士にふさわしい遺品であるといえよう。

THE  
HOLY BIBLE  
CONTAINING THE  
OLD AND NEW TESTAMENTS  
TRANSLATED OUT OF ORIGINAL TONGUES  
Newly Edited by the American Revision Committee  
A.D. 1901  
NEW YORK  
Thomas Nelson & Sons



・223×175 (mm), 1314頁 (総頁数)



Charles Buckley Tenny

この英訳聖書は AMERICAN STANDARD VERSION (アメリカ標準訳版) と一般に言われるものである。いわゆる1611年の King James Version (Authorized Version) が出版された後に、更なる写本の研究が進んでいたため、英米の研究者たちが協力して翻訳改訂に当たったが、後に両者の意思の疎通の問題や、見解の違いなどが生じた。そのためこれはアメリカ側が独自に出版したものである。「標準訳版」という表現は、すでに改訂訳版が1881年と1885年に世に出ているからである。しかもこの英訳聖書は後に続く、1952年の THE REVISED STANDARD VERSION (改訂標準訳 略称 RSV)、THE NEW AMERICAN STANDARD VERSION (新アメリカ標準訳 略称 NASV) の土台となった。聖書英訳裏面史だけでも興味は尽きないが、それはこのたびの趣旨からそれるのでここまでにする。テンネー博士がこれを最期まで手もとにもっていたのは、この標準訳版に先立つ1885年版の序言も冒頭に収められており、このアメリカ標準訳の詳しい序言も掲載されているので、新約聖書ギリシア語研究者にとって貴重な翻訳作業の経過と結果を見ることができるからである。ちなみにこのアメリカ標準訳では Jehovah は the Lord と the God に、the Holy Ghost は the Holy Spirit になっている。旧式な表現は当時の自然な英語に改められた翻訳である。博士がなくなられて後、特に第二次世界大戦後、個人および協同の聖書翻訳の企てが進み、まことにおびただしい数の英訳版を生み出した。テンネーが生き延びて、これらを見たら、それぞれをどのように評価したであろうか。

(関東学院大学名誉教授 高野 進)



# 『横浜開港と宣教師たち —伝道とミッション・スクール—』

横浜プロテスタント研究会編 有隣新書 2008年発行

本書は横浜開港により、幕末から明治に來日し、横浜で宣教を開始した11名の宣教師の活動を紹介している。副題に「伝道とミッション・スクール」とあるように、この11名は伝道と共に、ミッション・スクールの創設や発展にかかわった宣教師である。

この著作には本学関係者の佐々木晃（関東学院中高元教諭、J. C. ヘボン）、小林功芳（関東学院大学名誉教授、S. R. ブラウン）、川島第二郎（関東学院大学キリスト教と文化研究所研究員、N. ブラウン）、高野進（関東学院大学名誉教授、A. A. ベンネット）、小玉敏子（女子短期大学名誉教授、C. A. カンヴァース）の5名が執筆している。

初期宣教師の中で、バプテスト派のN. ブラウンとベンネットは素晴らしい足跡を残したにもかかわらず、ヘボンやS. R. ブラウンのように日本キリスト教史のなかで、あまり取り上げてこられなかった。これはバプテスト派宣教師の研究があまり出版されなかったこともあったが、最近になって、N. ブラウン研究で川島第二郎、ベンネット研究で高野進、バプテスト全般の研究で大島良雄（関東学院大学元教授）の著作が相次いで出版されてきたことは喜ばしいことである。

本書では、関東学院の源流である横浜バプテスト神学校の設立者ベンネットについて高野進氏が執筆をしている。

ベンネットは1909年10月12日に召天し、昨年で没後100年を迎えた。ベンネットは日本人に対して、「教育・宣教・社会奉仕に最高の能力と生涯のすべてを捧げた」とその生涯を高野氏は総括している。

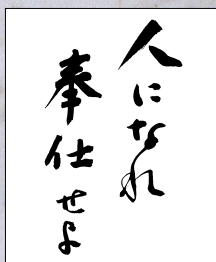
教育では、來日後まもなく、日本人伝道者養成のために聖

書研究クラスを開設し、それを発展させ、1884年に横浜バプテスト神学校を設立した。開設時はミッション本部の援助が得られず、ベンネットの献身的な努力で神学校を運営した。開設当時は、ベンネットを含め3名の教授、学生数は4、5名であった。ベンネットは神学校の創設者、校長、首席教授として、25年間貢献し、多くの日本人伝道者を育成した。

伝道では、1886年に横浜第一浸礼教会の牧師をN. ブラウンから引継ぎ、その他八王子や川崎をはじめ神奈川県下の宣教活動の責任を負っている。また、松本や根室など遠方に出かけ伝道活動をおこなっている。

社会活動では、ユニオン・チャーチでの説教、横浜 YMCA の書記、横浜港に停泊中の乗客、海員伝道、米国海軍病院のための奉仕活動をおこなった。また、1896年の三陸沖大津波に際して、見舞金や物資を持って被害地に赴き、約1ヶ月不眠不休の救済活動をした。この活動に対して、天皇から金杯を贈られたが、これを母校ブラウン大学に寄贈した。今もブラウン大学では、彼を記念して、奨学金制度を続けているという。

ベンネットの活動をとおり、「彼は聖書の言葉を知識として教えるのではなく、自ら実践してその模範を示すことにより、仕えるリーダー、しもべとしてのリーダー、今日でいうサーバント・リーダーとして生きた。これは私たちが学ぶべき、そして、世界においても、まず誰もが学び、自ら実践するべきことであろう。」とベンネットの生き方を我々が学び実践するよう勧めている。これは、ベンネットが関東学院の校訓である「人になれ 奉仕せよ」を文字どおり実践した生涯であったことを証している。  
(元学院史資料室主幹 三浦啓治)



関東学院 校訓

## 編集後記

◆「関東学院セツルメント」を開設し、活動したという事実は、関東学院史の中でも一際光を放つものではないでしょうか。◇多くの人からの募金により完成した「前進館」の敷地広さについて、セツルメント活動当時の資料（『基督教報』1030号）では「75坪」、セツルメント廃止後相当の年数を経た後の資料（『関東学院百年史』など）では「150坪」となりましたが、史料展および今号では「75坪」と判断しました。『基督教報』には「敷地総坪数75坪、運動場57坪、建物17坪半」と記載があり、すなわち「運動場坪数+建物坪数=75坪」とも言っています。これが「敷地総坪数+運動場坪数+建物坪数」ですと、約150坪となります。「敷地総坪数」という言葉をどのように解釈するかで、答えが分かれるのですが、判断の決め手となったのは、「セツルメント會館建築設計圖」です（残念ながら図面には凡その数値しかなく正確な敷地広さは不明）。「セツルメント會館建築設計圖」は、大学図書館所蔵『関東学院セツルメント記録』の中に収められています。『関東学院セツルメント記録』は、三浦啓治氏（元学院史資料室主幹）が大学図書館勤務時に渡部花子氏（渡部一高夫人）から直接資料を借りて作成した貴重な一冊です。（菊池）

## 資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第13号

発行日 2010(平成22)年3月5日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932